

研究ノート

続・留学生の就職活動における ソーシャル・サポートと自律性

藤本昌代¹⁾・浦坂純子²⁾・森山智彦³⁾

要約：本稿では、「2011年度同志社大学留学生アンケート（2012年3月実施）」に基づく分析結果を踏まえ、新たに「2012年度同志社大学留学生アンケート」を、2013年3月に学部・大学院を卒業、修了する予定の留学生を対象として2012年12月に実施し、理系学部・研究科などのデータを補強してもなお前回と整合的な結果が得られるかどうかを検証した。

分析では、前回と同様、回答者を就職活動の有無と就職決定の有無に基づいて3グループに分類し、3つの分析視点（就職活動の内容、ソーシャル・サポート、充実した活動経験）から比較した。その結果、就職が決定しているグループは、やはり自ら能動的に活動することを通じてソーシャル・サポートを獲得し、日本人学生と比べて遜色のない就職活動を展開していた。

キーワード：留学生、就職活動、ソーシャル・サポート、自律性

目次

1. はじめに
2. 調査概要
 - 2-1. 回答者の属性
 - 2-2. 就職活動の状況
 - 2-3. 将来の展望および学生生活全体の感想
3. 分析視点
 - 3-1. 仮説1：就職活動の内容
 - 3-2. 仮説2：ソーシャル・サポート
 - 3-3. 仮説3：充実した活動経験
4. 仮説検証
5. 考察
6. おわりに
7. 付録：単純集計表および自由回答

1) 同志社大学社会学部教授

2) 同志社大学社会学部教授

3) 下関市立大学経済学部特任教員

*2014年6月26日受付，2014年6月27日掲載決定

1. はじめに

近年、大学教育にグローバル化を求める動きが著しい。グローバル人材育成の掛け声のもと、文部科学省が様々な大学教育改革の支援プログラムを実施してきたのは周知の事実である。同志社大学も国際化拠点整備事業（G30）、グローバル人材育成推進事業（G30プラス）などに採択され、着実に実績を重ねてきた。その最もわかりやすい成果指標の1つが、留学生数の増加である。2013年5月1日現在の正規留学生数は949名に上り（学部483名・大学院前期博士課程⁽¹⁾172名・大学院後期博士課程⁽²⁾294名）、特別学生や留学生別科、日本語・日本文化教育センターで受け入れている短期の留学生を加えると1,200名を優に超えている⁽³⁾。また、留学生の出身国も60か国以上と多岐にわたっており、まさにグローバルに学びの裾野が広がりつつあると言える。

今後ますます増えるであろう留学生に対し、より充実した教育を提供するだけでなく、卒業後にその経験を存分に活かし、日本とそれぞれの出身国の懸け橋となるような存在に導く支援が求められるのは論をまたない。しかし、留学生の日本企業への就職には参入障壁があると言われてきた。内部労働市場を重視する日本企業の場合、数年で帰国するリスクがある留学生は、教育訓練費用に見合う長期的な貢献が望めないと敬遠されるからである。

その一方で、必要に迫られた日本企業のグローバル化も進行し、少子化による高度人材へのニーズも増えていることから、日本に慣れ親しんだ留学生への期待は高まりを見せ始めている。そこで留学生の卒業後の進路を把握し、現行の教育・支援の見直しを図ることを目的に、留学生の就職決定と就職活動の内容、学習態度、社会的スキルなどの関係について調査を行うことを企図した。

2011年度末に留学生の進路に関するパイロット調査（以下、第1回調査）を行ったところ、有効回答者数は49名と少なかったものの、一定の傾向を把握することができた⁽⁴⁾。その中で浮かび上がったのは、院前期生が日本特有の「早過ぎる」就職活動に対応できていないことである。院前期生は、ようやく大学院生活に慣れ始めた入学後半年ほどで就職活動を始めなければならず、戸惑いを感じる者も多かった。また留学生自身にも、就職活動が難航した際に自発的にキャリアセンターに赴いたり、日本人の友人・知人の助けを求めたりする傾向は見られず、受動的な姿勢が目立っていた。

そこで2012年度の調査（以下、第2回調査）では、全学の留学生の実態を把握するために回答率の向上に努めた。調査項目についても、第1回調査の内容を精査し、留学生の就職活動の内容を詳細に尋ねた上で、正課・課外活動やアルバイトへの取り組み、人的ネットワーク、将来展望などに関して幅広くデータが収集できるような設計を施し

ている。

本稿の構成は次の通りである。第2節では調査概要に加えて、単純集計から得られた主な知見を示す。第3節では分析視点として3つの仮説を提示する。第4節では仮説を検証し、第5節では分析結果について考察する。最後に第6節では分析、考察を踏まえ、留学生の教育、支援に対する具体的な含意を述べる。

2. 調査概要

第2回調査（2012年度同志社大学留学生アンケート）は、第1回調査と同様に、国際連携推進機構の下、著者らが調査班を組織し、主に留学生課およびキャリアセンターの協力を得て実施した。調査概要は、表1の通りである。

表1 調査概要

調査対象	2013年3月に学部・大学院を卒業・修了予定の正規留学生196名 (学部82名・院前期86名・院後期28名) (2012年春学期末の成績で卒業見込みが出ている者)
調査方法	郵送による自記式調査票調査(日本語版・英語版を併用)
調査時期	2012年12月3日(月)～2013年1月31日(木)
回答状況 回答率	回答者数142名(学部50名・院前期72名・院後期20名):72.5% 有効回答者数136名(学部45名・院前期71名・院後期20名):69.4%

2-1. 回答者の属性

表2は回答者の所属学部・研究科および課程を示している。学部生は45名(33.1%)、院前期生は71名(52.2%)、院後期生は20名(14.7%)であった。文理別では、文系が105名(77.2%)を占め、うち27名(全体の19.9%)が学部生、62名(全体の45.6%)が院前期生、16名(全体の11.8%)が院後期生である。一方、理系は31名(22.8%)で、うち18名(全体の13.2%)が学部生、9名(全体の6.6%)が院前期生、4名(全体の2.9%)が院後期生である。データの半数近くが文系の院前期生であり、特に社会学研究科や商学研究科が多い。

回答者の国籍は表3の通りである。85名(62.5%)が中国であり、特に院前期生の中では7割以上に相当する。韓国は27名(19.9%)だが、学部生と院後期生の中ではそれぞれ1/3を超えている。また、台湾は学部生こそいないが院生は12名いる。その他(東南アジア諸国やアメリカ、メキシコ、スウェーデン、オランダなど)も12名であり、学部生や院前期生はわずかだが、院後期生の中では2割を占めている。

男女比は、男性が52名、女性が84名と2:3で女性が多かった。年齢は、60歳が1名いるが、概ね21歳から44歳までに分布している。平均年齢は27.4歳、中央値は26歳であり、23～28歳で7割を占めている。女性のほうが年齢のばらつきは大きかった。

入学年は2008年から2011年の4年間に分布しており、2009年が37名（27.2%）、2011年が56名（41.2%）と、この2年間に特に集中している。

表2 回答者の所属学部・研究科および課程

学部・研究科	学部	院前期	院後期	合計	%
神学部・神学研究科	2	0	1	3	2.2
文学部・文学研究科	4	3	0	7	5.1
法学部・法学研究科	3	1	1	5	3.7
経済学部・経済学研究科	4	2	2	8	5.9
商学部・商学研究科	7	17	1	25	18.4
理工学部・理工学研究科	13	8	4	25	18.4
政策学部・総合政策科学研究科	3	7	3	13	9.6
文化情報学部・文化情報学研究科	0	4	0	4	2.9
社会学部・社会学研究科	3	16	7	26	19.1
ビジネス研究科	0	4	0	4	2.9
生命医科学部・生命医科学研究科	5	1	0	6	4.4
心理学部・心理学研究科	1	1	0	2	1.4
グローバル・スタディーズ研究科	0	7	1	8	5.9
合計	45	71	20	136	100.0

理工学部・理工学研究科、生命医科学部・生命医科学研究科を理系、それ以外を文系とする。

表3 回答者の国籍

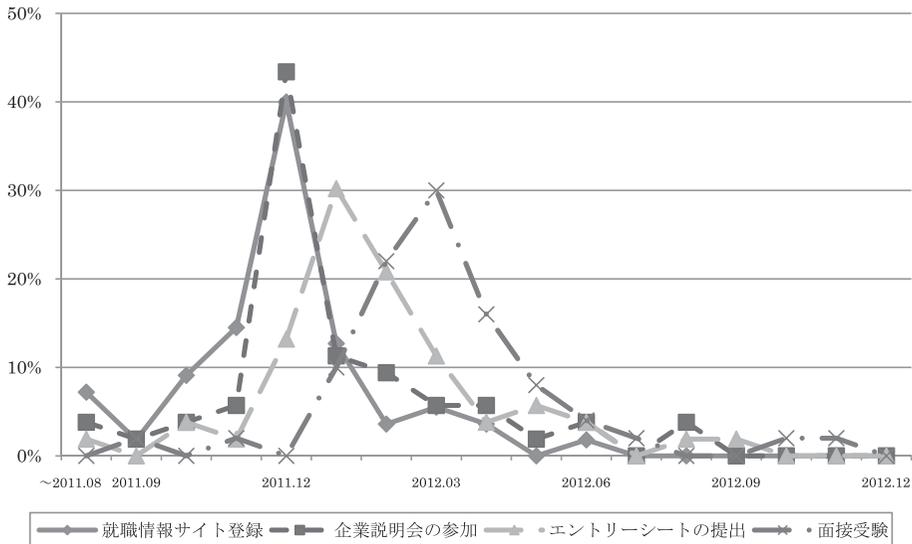
	中国	台湾	韓国	その他	合計
学部	27 (60.0%)	0 (0.0%)	16 (35.6%)	2 (4.4%)	45 (100%)
院前期	51 (71.8%)	10 (14.1%)	4 (5.6%)	6 (8.5%)	71 (100%)
院後期	7 (35.0%)	2 (10.0%)	7 (35.0%)	4 (20.0%)	20 (100%)
合計	85 (62.5%)	12 (8.8%)	27 (19.9%)	12 (8.8%)	136 (100%)

2-2. 就職活動の状況

次に、就職活動の状況を概観する。就職活動を行った者は60名（44.1%）、行わなかった者は70名（51.5%）であった。就職活動は行っていないが就職先が決定している者も5名（3.7%）存在しており、無回答は1名（0.7%）だった。

図1は、はじめて「就職情報サイト（リクナビなど）に登録した」「企業説明会に参加した」「エントリーシート（以下、ES）を提出した」「企業の人事面接を受けた」時期の分布をそれぞれ示している。就職情報サイトや企業説明会は、就職活動が解禁された2011年12月に一気に高まっている。就職活動を行った者のうち、この12月までに72.6%が就職情報サイトに登録し、58.6%が企業説明会に参加している。その後ESの提出が増え始め、2012年1月に提出した者が最も多くなり、2月までに全体の7割強が提出している。人事面接に関しては、2012年1月に約1割、2月に約2割、3月に約3割が受けている一方で、4月や5月になって受けたと回答した者も少なからず存在す

る。



就職情報サイトへの登録 N=57, 企業説明会への参加 N=56, ES の提出 N=55, 人事面接の受験 N=51

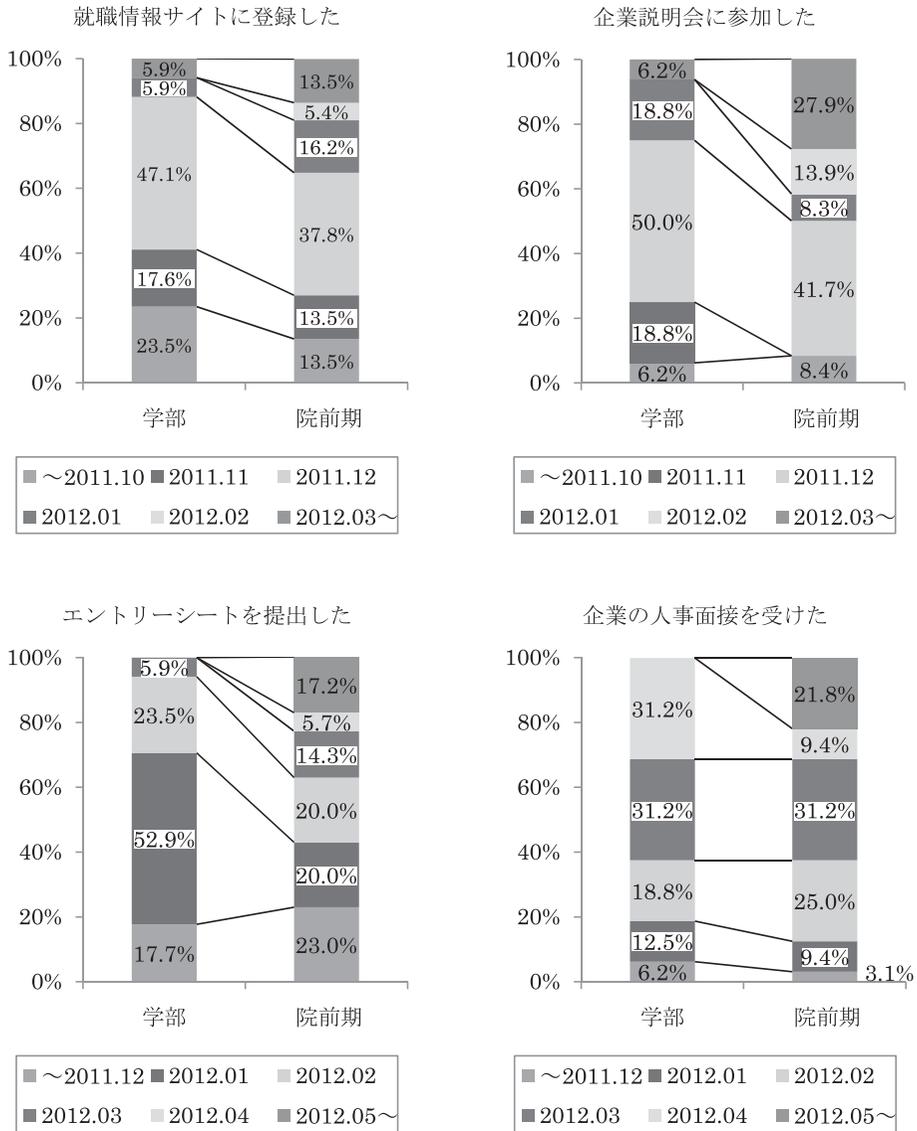
図1 就職活動開始時期

では、学部生と院前期生の間で、就職活動の開始時期に違いはあるのだろうか。図2は上記4点の就職活動をはじめて行った時期について両者を比較しており、各棒グラフの下方ほど早い時期に行っていることを表している。分析結果から、学部生の8割前後が2011年12月までに就職情報サイトに登録し、企業説明会にも参加していることがわかる。一方院前期生も、就職情報サイトには2012年1月までに約8割が登録するなど学部生並みのペースを保っているが、企業説明会への参加は低調で、2011年12月までに半数ほどしか参加しておらず、約2割は2012年3月以降になってから参加している。

同様に、ESも学部生の約7割が2012年1月までに提出しているのに対して、院前期生でそれまでに提出した者は4割余りである。人事面接については、学部生も院前期生も6割強が2012年3月までに受けている。しかし、学部生全員が2012年4月までに人事面接を受けているのに対して、院前期生の2割以上は、5月以降になってようやく人事面接に到達していることがわかる。

以上より、就職情報サイトには学部生も院前期生も概ね同時期に登録しているが、企業説明会への参加やESの提出といった具体的な活動に進む時期は、院前期生のほうが平均して1~2ヶ月ほど遅い。また、人事面接に関しては、院前期生の場合、学部生と同じペースで受けている者と2ヶ月以上遅れている者に二極化していると言えよう。

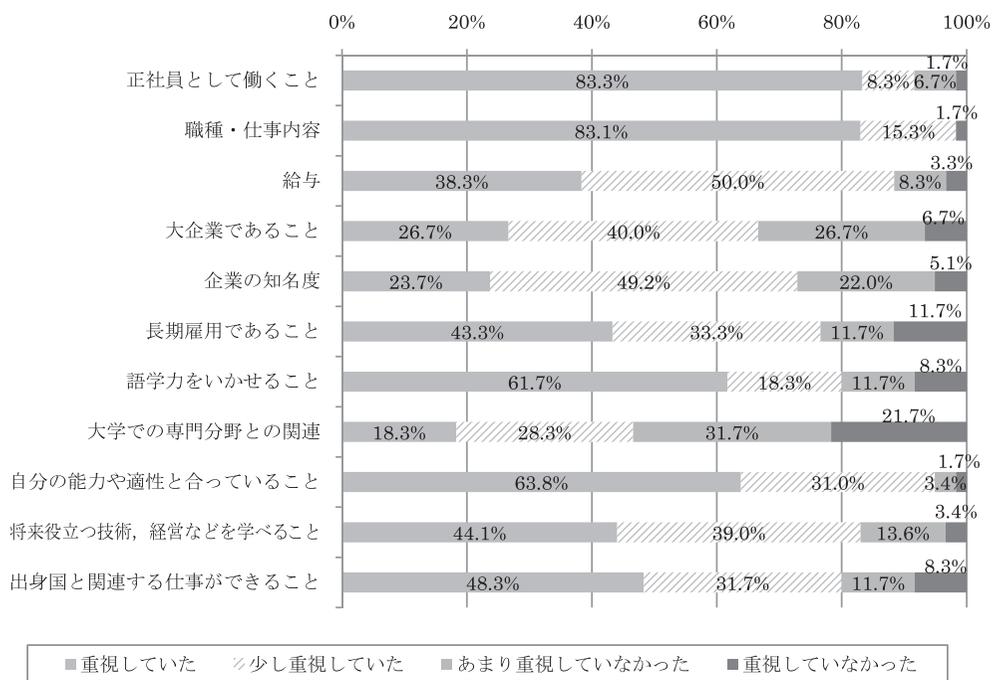
図3は、就職活動をはじめたころ、各項目をどのくらい重視していたかについて、4段階尺度で尋ねた結果を示している。大半の項目で「重視していた」「少し重視してい



就職情報サイトへの登録 N=57, 企業説明会への参加 N=56, ES の提出 N=55, 人事面接の受験 N=51

図2 課程別の就職活動開始時期

た」が選択されている一方で、「大企業であること」「企業の知名度」は「重視していた」が3割に満たない。また、回答者の多くが中国など外部労働市場型の国の出身であるにもかかわらず、「長期雇用であること」を重視している点は興味深い。「大学での専門分野との関連」を重視している者は半数に満たないのに対して、「語学力を生かせること」を重視している者は8割に上る。回答者の大半が文系であることを考慮すると、大学での専門分野と就職との関連性が低いことや、長期雇用を前提とする日本企業の特徴を理解し、それに適応しながら語学力という自身の強みを武器にして就職活動に臨ん



「職種・仕事内容」「企業の知名度」「将来役立つ技術、経営などを学べること」N=59、「自分の能力や適性と合っていること」N=58、その他の項目 N=60

図3 就職活動をはじめたころ重視していたこと

でいることがうかがえる。

就職活動で接触した企業数を集計すると、平均して約16社にESを送り、約7社の人事面接を受け、1~2社にOB・OG訪問をしている。ESを送った企業数やOB・OG訪問をした企業数は、学部生と院前期生の間にはほとんど違いはないが、人事面接を受けた企業数は、2社ほど学部生のほうが多い。院前期生は就職活動が遅れがちなことから、人事面接を受ける機会が少ないと考えられる。また、内定をもらった企業数も、学部生が1社以上あるのに対して、院前期生のそれは1社に満たない。

キャリアセンターの利用状況を見ると、就職活動を行った60名のうち、キャリアセンターが提供するサービスを利用した者は53名、利用しなかった者はわずか7名であった。利用したサービスは、複数回答で「学内での企業説明会、セミナー、ガイダンス」が86.8%と最も多く、以下「資料(本や雑誌、企業情報)」(60.4%)、「履歴書、ES相談」(54.7%)、「e-career、キャリアセンターのHP」(49.1%)と続く。「面接相談」「キャリアカウンセラーによる相談」「進路相談」「求人票」なども3~4割が利用しており、唯一利用が少なかったのが「インターンシップに関する相談」(13.2%)であった。一方、キャリアセンターが提供するサービスを利用しなかった理由としては、4名が「サービスの利用の仕方がわからなかった」、3名が「知りたいと思うことがなかった」、

1名が「場所がわからなかった」と回答している。

さらに、内定の状況や内定先についても見ていきたい。就職活動を行った60名のうち1社以上の内定をもらっている者は41名(68.3%)だが、うち4名は調査時点でも就職活動を継続していた。一方、調査時点で内定をもらっていない者は19名(31.7%)おり、うち6名は既に就職活動を終えている。内定をもらっている41名のうち、1/4が2012年4月にはじめて内定をもらい、5月までに半数に到達している。また、6月、7月に内定をもらった者が5名ずつ、11月に内定をもらった者が6名いる。就職活動を終えた時期も、ほぼ内定をもらった時期と重なっていた。

卒業後に就職することが確定している42名は、1名を除いて正社員として就職する。内定先の87.8%は日本企業であり、69.0%が総合職、14.3%が技術職、11.9%が専門職、4.8%が一般職として働く予定である。また、約2/3は最初の勤務(研修)地が決定しており、京都府、大阪府、兵庫県などの関西地域が1/3を占めるほか、東京都が9.5%、日本以外が16.7%であった。内定先をはじめて知ったきっかけを尋ねると、「企業説明会、セミナー、ジョブフェア」「もともと知っていた」がそれぞれ26.8%、「インターネット」「日本人の知り合いの紹介」「出身国の知り合いの紹介」がそれぞれ9.8%だった。

一方、内定先に就職しようと思った決め手(あてはまるもの3つ)を尋ねた結果、ほぼ半数が「職種・仕事内容」「自分の能力や適性に合っていること」「企業や社員の雰囲気」を、1/4が「正社員として働くこと」「語学力をいかせること」「将来役立つ技術、経営などを学べること」「出身国と関連する仕事ができること」「大学での専門分野との関連」を挙げている。就職活動をはじめたころ「大学での専門分野との関連」を重視している者は他項目に比して少なかったが(図3)、その時点から重視している者は、専門分野との関連性が就職の決め手になったのではないか。

また、内定先で働こうと考えている期間は、「3年未満」「3年以上5年未満」が合わせて25.0%であるのに対して、「10年以上」が42.5%、「5年以上10年未満」が32.5%であり、比較的長期間1つの企業で働こうと考えていることがわかる。

2-3. 将来の展望および学生生活全体の感想

最終的にどの国で働きたいと考えているかという設問に対しては、回答者全体(135名)の33.3%が「日本」、30.4%が「出身国」を挙げる一方で、22.2%は「まだ考えていない」ということだった。また、先々の具体的なキャリアビジョンを自由に記入してもらったところ、最も多かったのが「起業」と「教員・研究職」(それぞれ17.9%)であり、1割強がそれら以外の具体的な仕事内容を挙げていた。

最後に、卒業後の進路および学生生活全体に対する満足度を尋ねると、いずれも7～

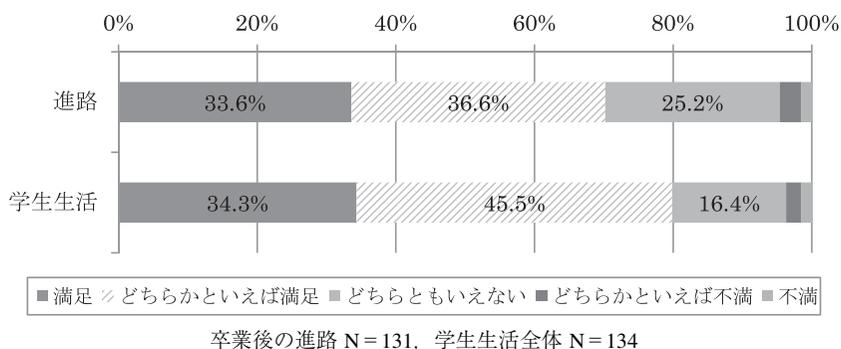


図4 卒業後の進路および学生生活全体に対する満足度

8割が「満足」「どちらかといえば満足」と回答している（図4）。なお、図4には示していないが、卒業後の進路に関しても学生生活全体に関しても、課程や文理による満足度の違いはほとんど見られなかった。

日本の大学・大学院で学びながら日本特有の就職活動を行おうとする留学生にとって、その開始時期の早さや方法を知るためには、ある程度日本で生活に慣れ親しむことが不可欠である。そこで回答者の日本における平均居住年数を調べたところ、学部生が4.93年、院前期生が3.31年、院後期生が5.75年であった。学部生は4年生が多いことから、入学前の1年間を日本で過ごし（日本語学校などに通う者が多い）、院前期生は出身国の大学を卒業した後、日本で1年間を過ごしてから入学していることがうかがえる。院後期生も前期課程から来日しての進学はあり得るが、大学は出身国で卒業している可能性が高い。

より詳しく大学院生の出身校を調べると、同志社大学（14.5%）を含め、日本の大学出身者は30.9%、海外の大学から直接入学した者は21.8%、日本語学校を経て入学した者が47.3%であった。留学生であっても日本語で講義を受けなければならないため、海外の大学出身者の中には日本語を専攻した者が多く含まれている。また、日本語学校では、大学・大学院進学実績が重視されるため、学生が入手できるのは企業よりも大学の情報が多い。これらのことから、約7割の留学生が、日本の大学に入学できるだけの日本語能力を持っていても、日本の大学が置かれている状況や大学を取り巻く制度、社会情勢に不案内であると考えられる。学部生であれば、日本での学生生活を（日本語学校などを含めて）3年半ほど経験してから就職活動に臨めるが、院前期生であれば入学後半年ほどで就職活動を開始しなければならず、困難に直面していることが予想される。

3. 分析視点

以下では分析対象⁽⁵⁾135名を3グループに分け、3つの分析視点から仮説を立てて検証する。グルーピングは第1回調査に倣い、就職活動の有無（問10）と就職決定の有無（問20）に基づいて実施している。具体的には、就職活動をして、就職が決定しているグループをA、就職活動はしたが、就職が決定しなかったグループをB、就職活

表4 分析対象のグルーピング

就職活動あり	60	正社員	37	グループA (37名)
		非正社員	0	
		進学	1	グループB (23名)
		就職活動継続	14	
		その他（帰国など）	4	
		決まっていない	4	
就職活動なし	75	正社員	4	グループC (75名)
		非正社員	1	
		進学	36	
		就職活動	7	
		その他（帰国など）	4	
		決まっていない	23	
合計	135		135	

動そのものをしなかったグループをCとしている（表4）。なお、表5は所属学部・研究科別、課程別のグルーピングである。文理別に集計すると、文系104名のうち、グループAは30名（28.8%）、グループBは20名（19.2%）、グループCは54名（51.9%）、理系31名のうち、グループAは7名（22.6%）、グループBは3名（9.7%）、グループCは21名（67.7%）となっている。

表5 所属学部・研究科別、課程別グルーピング

グループ	学部			院前期			院後期			合計
	A	B	C	A	B	C	A	B	C	
神学部・神学研究科	1	0	1	0	0	0	0	0	1	3
文学部・文学研究科	0	0	4	0	1	2	0	0	0	7
法学部・法学研究科	2	1	0	0	0	1	0	0	1	5
経済学部・経済学研究科	2	0	2	0	1	1	0	0	1	7
商学部・商学研究科	5	0	2	8	5	4	0	0	1	25
理工学部・理工学研究科	3	2	8	3	1	4	0	0	4	25
政策学部・総合政策科学研究科	0	0	3	0	3	4	0	1	2	13
文化情報学部・文化情報学研究科	0	0	0	2	1	1	0	0	0	4
社会学部・社会学研究科	2	0	1	5	3	8	1	0	6	26

ビジネス研究科	-	-	-	2	1	1	0	0	0	4
生命医科学部・生命医科学研究科	0	0	5	1	0	0	0	0	0	6
心理学部・心理学研究科	0	0	1	0	0	1	0	0	0	2
グローバル・スタディーズ研究科	-	-	-	0	3	4	0	0	1	8
合計	15	3	27	21	19	31	1	1	17	135

3-1. 仮説1：就職活動の内容

留学生は、どのような内容で就職活動を行っているのだろうか。日本人学生と同様に早くから熱心に行っている者、学年が上がり卒業要件を満たせる見通しがついてからゆっくり始める者など様々だろう。また、前述のように出身国の就職活動との違いから、院前期生を中心に日本特有の就職活動に出遅れている留学生もいるはずである。就職活動の内容が、そのまま就職決定の有無に直接的な影響を及ぼすことは大いにあり得ることから、仮説1を以下のように設定する。

仮説1：日本人学生と変わらぬ内容で活動を行う留学生は、就職を決定できる可能性が高い。

具体的には、問11、問17を用いて就職活動の開始時期というペース面と、接触企業数という密度面について、就職活動を行ったグループAとBの比較を行う。さらに、日本で就職活動を行う上で、戸惑った点や困った点（問32）をグループごとに分析することで、留学生の状況に応じた支援体制のあり方についても考察したい。

3-2. 仮説2：ソーシャル・サポート

留学生は出身国を離れて様々な不安を抱きながら生活をしている。学生生活を送る上で、日本人学生であれば当たり前知っていることが留学生にはわからず、それが就職活動にも影響を及ぼしていることが予想される。留学生であることのハンディキャップを克服するためには、同国人や留学生仲間だけでなく、日本人学生をはじめ多種多様な支援者の力を幅広く借りることが有用であると考え、仮説2を以下のように設定する。

仮説2：多種多様な支援者を持つ留学生は、就職を決定できる可能性が高い。

グループごとの居住形態（問3）、生活支援者（問9）、就職活動支援者（問12）、キャリアセンターが提供するサービスの活用（問15）に注目し、留学生を取り巻くソーシャル・サポートを分析する。居住形態については、同居者の存在に目を向ける。同居者が日本の事情を知るための窓口となり、身近な相談相手にもなり得ると考えるからで

ある。生活支援者の存在は、日本の生活への適応に、ひいては就職活動に影響を及ぼすだろう。特に、支援者が同国人や留学生仲間なのか（同質的）、日本人学生をはじめとする多種多様な人々なのか（異質的）は、日本特有の就職活動に関する情報収集にも影響を及ぼすと予測される。加えて、就職活動について直接相談できる人々の存在は非常に重要である。就職活動についても支援者の有無、さらに支援者が同質的であるのか、異質的であるのかに着目して検討する。キャリアセンターには、資料や求人票、HP、説明会など、深く人と関わらなくても情報を取得できるサービスと、進路相談やES相談など、職員と一定時間をかけて話し合っただけで情報を取得するサービスがあり、どのような支援を受けるのかによって就職活動に影響を及ぼすと予測される。ここでは後者の対人サービスが有効であると想定している。

3-3. 仮説3：充実した活動経験

支援体制だけでは、留学生の現状を捉えることはできない。そもそも就職活動をしている留学生に、周囲の人々と関わろうとする「積極性」があったかどうかを問う必要がある。大学や地域に溶け込み、地に足がついた生活を送ること、様々な活動を通じて日本人との交流を深めること、真面目に学習に取り組むことが、社会的ネットワークを広げ、日本の事情を知り得る機会や相談相手を見つける機会を増やす上で重要である。その結果、日本人学生と共にこの地で就職活動を行い、社会に出ることを指向させるのではないかと考え、仮説3を以下のように設定する。

仮説3：充実した活動経験を持つ留学生は、就職を決定できる可能性が高い。

活動内容については、以下の2点でグループごとの傾向を比較する。第一に、問5を利用し、「体育会・部活動」「サークル・同好会の活動」「地域やボランティアの活動」「宗教関係の活動」「インターンシップ」への参加の有無をグループごとに比較する。各種活動に積極的に参加することが、就職活動や就職決定の原動力になっていることが予想される。第二に、問6～8を利用して、アルバイト経験の有無、さらに経験がある場合は、最も長く続けたアルバイトの期間と週平均アルバイト時間（授業期間中）についてグループごとに比較する。アルバイトという形で日本社会での就業を経験することを通じて、実践的な日本語を活用する機会が増加すると考えると、就職活動や就職決定には良い影響を及ぼすことが予想される。

4. 仮説検証

まず、仮説1「日本人学生と変わらぬ内容で活動を行う留学生は、就職を決定できる可能性が高い」について検証する。図5は、就職活動の開始時期をグループAとBで比較したものである。はじめて就職情報サイトに登録した時期と企業説明会に参加した時期に関しては余り差が見られず、むしろ就職が決定していないグループBの方が早くから始めている。ところが、グループAの8割近くが2012年2月までにESを提出しているのに対し、グループBでは6割強にとどまっている。さらに、はじめて企業の人事面接を受けた時期もグループAとBで大きく異なっており、グループAの9割以上が2012年4月までに受けているのに対して、グループBは6割弱に止まっている。

また、就職活動で接触した企業数をグループAとBで比較すると、ESを送った企業数、人事面接を受けた企業数共に、グループBはAよりも平均で3~4社ほど少な

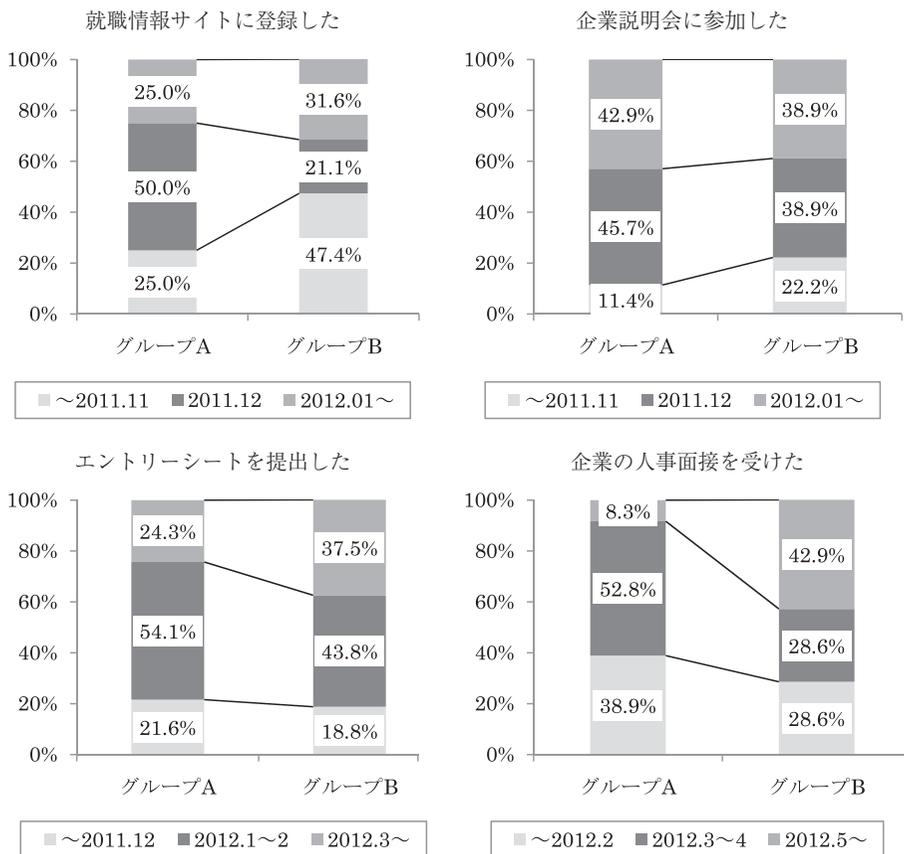


図5 グループ別の就職活動開始時期

い（図6）。就職が決定すれば、その時点で就職活動は終了するはずなので、グループAは短期的に多くの企業と接触していることを表している。一方グループBは、長期にわたって就職活動を行っているが、企業と接触すること自体が少ない、あるいは就職活動の開始が遅れたために、物理的に接触できる企業数が限定されていることを示唆している。

以上をまとめると、就職情報サイトへの登録や企業説明会への参加に関して留学生が著しく出遅れているわけではないが、ESの提出や企業の人事面接を受ける段階になると、日本人学生と同じペースで活動する者と遅れる者とのわかれ、前者は接触した企業数も多く、就職を決定している傾向にある。換言すれば、日本人学生と同じペースで就職活動が進まない留学生は、特に企業の人事面接に受ける段階で大きな壁に直面していると考えられる。

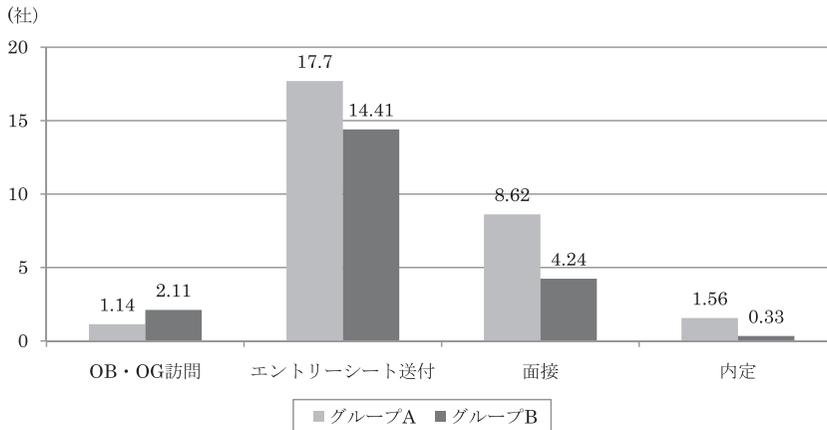


図6 グループ別の就職活動で接触（該当）した企業数

では、留学生は、就職活動を行う上で、どのような点に戸惑ったり困ったりしたのだろうか。またそれらに関して、グループAとBで違いはあるのだろうか。

図7を見ると、全体的には「就職活動を行う時期が早い」「ESの書き方が難しい」「SPIや筆記試験が難しい」「たくさんのお金がかかる」といった点が挙げられている。グループAでは、「ESの書き方が難しい」「たくさんのお金がかかる」「SPIや筆記試験が難しい」など実際の選考内容に関する点が多く挙げられている半面、グループBでは、これらに加えて「留学生を採用する企業が少ない」「企業の情報が多すぎて選べない」「欲しい企業の情報が得られない」「就職活動を行う時期が早い」といった就職活動の環境や方法に関する点を挙げる者が、グループAに比べて1~4割ほど多い。すなわち、グループBの留学生は、選考に至るまでの就職活動の環境や方法に馴染めていないことがうかがえる。

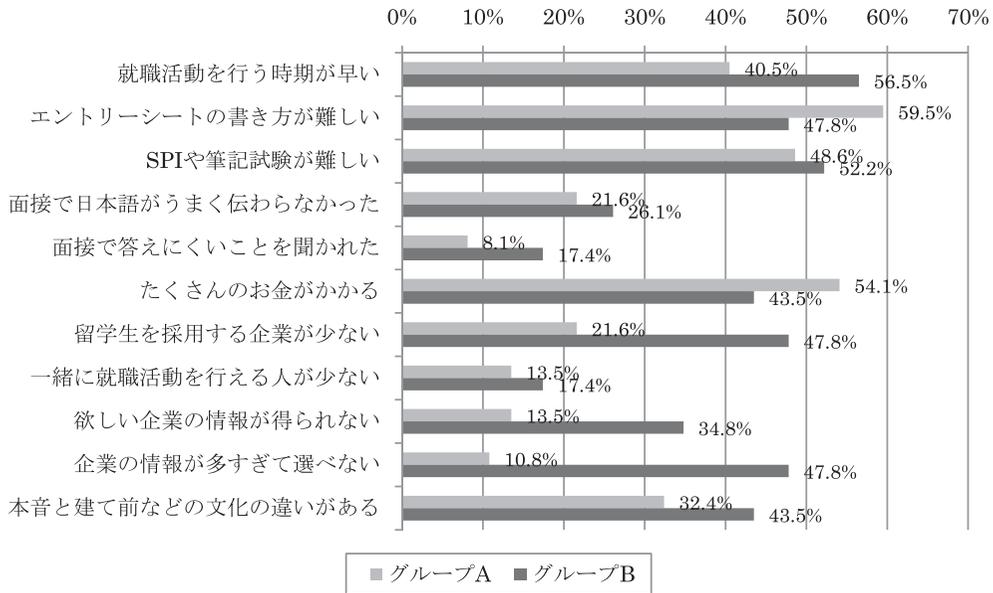


図7 グループ別の就職活動を行う上で戸惑った点や困った点

第2節でも述べたように、院前期生を中心に、在学中の早い時期から始まる日本特有の就職活動の状況を知らなかったり、戸惑いを感じて出遅れがちになったりした場合、その遅れが特に人事面接を受ける段階で大きな壁となり、留学生を受け入れる企業との接点を持ちにくくなっているのではないかと推察される。

次に、仮説2「多様な支援者を持つ留学生は、就職を決定できる可能性が高い」について検証する。日々の生活で同居者に恵まれれば、情報共有や相談だけでなく、慣れない環境下での精神的安定を保つという意味でも効果が見込まれる。そこでグループA～Cの居住形態を比較したところ、グループBの一人暮らし率が95.5%と非常に高いことがわかった。また同居者がいる場合でも、グループBは親族以外の同居者はおらず、様々な日本事情に疎くなりがちであることがうかがえる。

個人的な悩みを相談したり、困ったときに助けになってくれる生活支援者について、「日本人学生」「出身国の人（留学生含む）」「それ以外の国の人（留学生含む）」「家族・親戚」「本学教員」「本学職員」「その他日本人」「その他（具体的に）」の中であてはまる人の数の平均値をグループA～Cで比較してみたところ、グループAが3.0、Bが2.0、Cが2.8とグループAが最も多く、多様な生活支援者を保持していた。属性別では文系が2.7、理系が3.3と理系の方が多様な支援者を保持しており、学部生が3.2、院前期生が2.5、院後期生が3.0と院前期生がやや支援者に恵まれない傾向にある。

図8は、生活支援者が外国人のみで閉じているのか、日本人にも広がりを見せているのかを示している。外国人のみで閉じている傾向にあるのがグループBであり、31.8%が日本人との関わりを持っていない。対照的にグループAは8割が日本人を含んだ

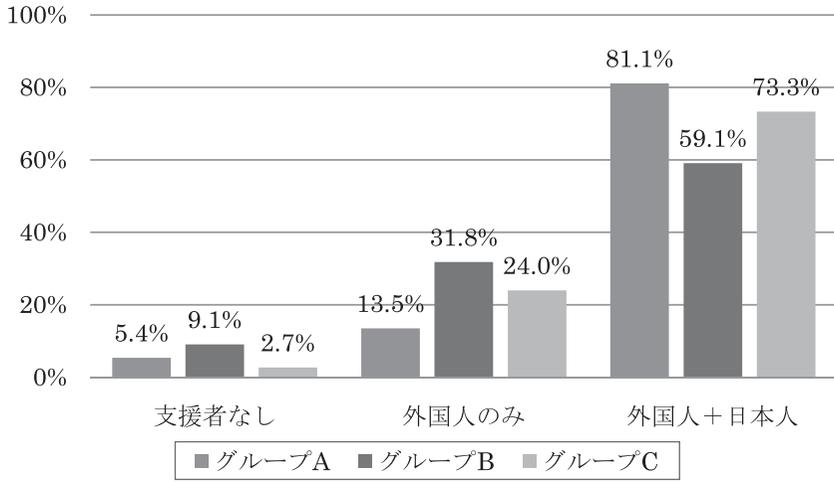


図8 グループ別の生活支援者

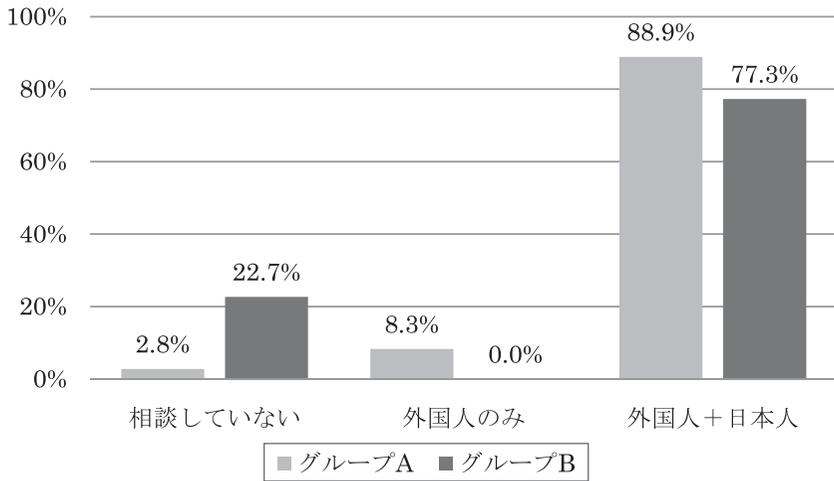


図9 グループ別の就職活動支援者

生活支援者を持ち得ている。第1回調査に比べて、グループBで日本人を含む人的ネットワークの中にいる者が減少傾向にあるのが気付きである。

なお、生活支援者の中に教職員が含まれているかどうかについて、第1回調査ではいずれのグループも半数以上が教職員から支援を受けていると回答していたが、今回はグループCの7割近くが選択しており、教職員と近い関係が見受けられるものの、就職活動を行ったグループA、B共に3割程度しか選択しておらず、生活支援者としての認識は低かった。

就職活動の仕方（エントリーの仕方やESの書き方、企業情報の収集、面接など）について相談する就職活動支援者について、「日本人学生」「出身国の人（留学生含む）」「それ以外の国の人（留学生含む）」「家族・親戚」「本学教員」「本学職員」「その他日本

人」「その他（具体的に）」の中であてはまる人の数の平均値をグループ A と B で比較してみたところ、グループ A が 2.8, B が 2.1 とややグループ A のほうが支援者の種類は多いが、双方とも生活支援者に比べて少ないことがわかった。属性別では、文系は 2.2 と少なく、理系は 4.0 と非常に多い。学部生、院生には大きな違いはなく、出身国別では中国、香港、韓国が 3.0 を下回っているのに対して、台湾の学生の支援者の種類は 3.4 と多様であった。

図 9 は、就職活動支援者が外国人のみで閉じているのか、日本人にも広がりを見せているのかを示している。日本人を含む異質性の高い支援者は、グループ A が 88.9%, B が 77.3% となり、就職決定と異質性の高い人的ネットワークの正の関係が見てとれる。グループ B の 22.7% が誰にも就職活動の相談をしておらず⁽⁶⁾、孤立している者がいる可能性がある。

次に、グループ A と B におけるキャリアセンターの対人、対物サービスの利用の比較を行う。キャリアセンターのサービスは、職員による進路相談、ES の書き方、面接の指導など、個別に対面で相談できるものと、HP で情報検索を行ったり、資料を調べたり、説明会などの大勢で参加するものなど、対人コミュニケーションをせずに情報を取得できるものがある。不慣れな外国での就職活動においては、対人で情報を得ることと、対物や個別面談なしで情報を得ることでは、情報の量・質に違いがあると予想する。

そこで、「資料（本や雑誌、企業情報）」「求人票」「学内での企業説明会、セミナー、ガイダンス⁽⁷⁾」「e-career、キャリアセンターの HP」を対物で情報取得するサービスとし、「進路相談」「履歴書、ES 相談」「面接相談」「インターンシップに関する相談」「キャリアカウンセラーによる相談」を対人で個別に情報取得するサービスとして、グループによる違いを比較したところ、グループ A は 78.1% が対人で個別に情報取得しているのに対して、グループ B は 66.7% とやや少なく、33.3% が人と積極的に関わらずに情報取得している傾向が見られた。

以上をまとめると、グループ A は一人暮らしが最も少なく、日常生活、就職活動において多様な支援者を保持している。またキャリアセンターを利用する際も、教職員とのコミュニケーションを通じて情報取得しており、支援者を自ら増やす能動性を備えていると言える。このことからグループ A は、社会的スキルが高く、自らソーシャル・サポートを充実させることができていると考えられる。一方グループ B は、ほとんどが一人暮らしであり、生活支援者が外国人のみという同質的な集団の中で生活している。就職に関しても、誰にも相談できずに孤立している様子がうかがえ、キャリアセンターの利用の仕方においても消極的な傾向が見られている。このことからグループ B は、ソーシャル・サポートを得られにくい状況にあり、それらを自ら充実させる積極性にも欠けていると言える。

最後に、仮説3「充実した活動経験を持つ留学生は、就職を決定できる可能性が高い」について検証する。課外活動経験は、留学生の社会的視野やネットワークを広げる効果が期待され、アルバイト経験も日本語能力向上が見込めることから、それぞれ日本社会に対する適応への積極性の指標と見なして検討する。

「体育会・部活動」「サークル・同好会の活動」「地域やボランティアの活動」「宗教関係の活動」「インターンシップ」のいずれかの活動に参加したことがある者の割合を見ると、グループAが54.1%と最も高く、グループBは50.0%、グループCは50.7%とやや低めである。しかし、第1回調査に比べると、その差は大きくない。また、参加したことがある活動の合計数を見ると、5種類の活動のうち3種類の活動に参加した者が最多であるが、グループBは最多でも2種類にとどまっている。平均値で見ても同様の特徴が表れており、グループAが0.92種類と最も多く、次いでCが0.75種類、Bが0.64種類であった。

なお、属性別の傾向を見ると、文系より理系、院生より学部生、女性より男性のほうが熱心に活動に参加している様子がうかがえる。この中で、特に院前期生の参加状況が、他の属性に比べて目立って悪いことに留意したい。また、インターンシップ以外の個別の活動ごとに参加状況をグループA~Cで比較すると(図10)、グループBは、「体育会・部活動」こそグループAと変わらないものの、それ以外の参加状況は悪く、様々な社会的ネットワークから取り残されている可能性がある。

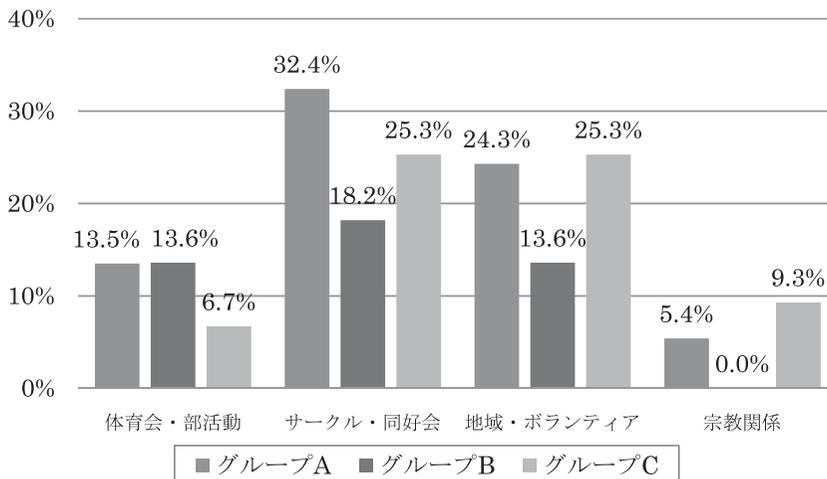


図10 グループ別の大学在学中に参加した活動

一方、最も長く続けたアルバイトが2年以上の者の割合は、グループBが47.8%と最も高く、グループAは43.2%、グループCは41.3%とやや低めである。これについても、第1回調査に比べると、その差は接近している。週当たり平均アルバイト時間が

20時間以上の者の割合も、グループBが21.7%と最も高く、次いでグループAが16.2%、グループCが13.3%であった。今回もやはり、熱心にアルバイトをすることが進路決定には弊害を及ぼしている可能性を示唆する結果となっている。

なお、属性別の傾向を見ると、理系より文系、院生より学部生のほうが熱心にアルバイトをしている様子がかがえるが、これは、理系や院生が学業に相当時間を割かなければならない実情を反映していると解釈できる。特に、院前期生は、最短修業年限が2年と短いため、「2年以上」の長期アルバイトができていないのは当然である。また、性別については、期間は女性のほうが長めで、時間は男性のほうが長めであった。

以上をまとめると、グループAは、充実した活動経験を持っており、それらを通じて大学や地域に溶け込み、日本人とも交流を深めたことが、就職の決定に有効に作用したと考えられる。それに対してグループBは、いずれの活動にも時間を割いていない分、長期、長時間にわたってアルバイトをしている者が多い。アルバイトも日本社会に溶け込み、人的ネットワークを構築する有効な手段ではあるが、実態としては、むしろ熱心にアルバイトをすることが就職の決定の妨げになっていると言わざるを得ないだろう。

5. 考 察

これらの分析結果を踏まえて、就職が決定した者としなかった者について考察を行う。特徴的だったのは、経済活動（アルバイト）に重点を置いている留学生の就職活動が順調に進まず、ソーシャル・サポートを受けられる環境にもなく、大学との接触も少なく、それらが就職の決定を阻害している蓋然性が高い点である。同志社大学の留学生は比較的奨学金に恵まれているにもかかわらず、学生生活に不慣れな時点からアルバイトを始めている可能性があるが、その理由として、アルバイトが社会勉強や日本語能力の向上につながり、疑似インターンシップとして就職活動に有利になるという思い込みがあるのではないか。実際は、本分を全うしている留学生のほうが順調に就職を決定している（グループA）。いくら大学が留学生に対して学習、就職支援を行おうとしても、留学生自身の目がそれらに向いていなければ、グループBを減少させることは難しい。

また、これは日本人学生にも言えることであるが、大学での学業は役に立たず、社会人と直接関わり、企業や仕事に関する情報を取得することのみが就職活動を有利に進める手立てであるという思い込みで本分を疎かにする者は、結局、学力向上が期待できず、就職活動でも評価され得ない。さらに学外にいる時間が長いため、大学に集積する新卒採用に関する情報を取得できずに、結果的に就職活動に出遅れてしまうのである。

教務データから、回答者の取得単位数との関係を分析すると、学部生については、取

得単位数と生活支援者の種類の数 ($r = .305$)、大学在学中に参加した活動の種類の数 ($r = .398$) で正の相関がみられ、特に就職活動支援者の種類の数 ($r = .770$) との正の相関は非常に強かった。したがって、学習に向かう姿勢と就職の決定には密接な関係があるといえる⁽⁸⁾。留学生の学習と就職の関係については、取得単位数以外にも GPA や大学(研究室や図書館など)での滞在時間、授業外学習時間など、学習成果や学習への注力度などを用いて、さらに傾向を分析する必要があるだろう。

6. おわりに

本稿では、就職活動で困難に直面する留学生が一定数存在することを示し、その理由を解き明かすことによって、直接的な就職活動支援を提供するだけでは不十分であることを論じてきた。留学生をより深く大学に関わらせ、学力と同時に情報検索リテラシーを高め、人的ネットワークを構築させること、すなわち本分を全うさせるべく「教育型」の支援を提供することが求められている。以下、その方向性について、具体的な提案を含めて触れておくことにする。

第一に、留学生自らの意思で、主体的に活動させるための仕掛けやペース作りが必要である。例えば同志社大学の場合、院生にはチューター制度があるが、学部生にはない。1対1よりも留学生と日本人学生が数名ずつ支援グループを組めば、決められた相談相手との相性で苦勞したり、狭い人間関係で悩んだりすることも少ないだろう。また、相談相手となる日本人学生にとっても、留学生との異文化コミュニケーションを通じて、外国への関心や理解が深まるなどの教育効果も期待できる。院生については、チューターとなる日本人院生の多くが就職活動未経験者であることから、就職活動については学部生の支援グループに加わることも有効だろう。教員とのパイプを強めるために、ゼミの担当教員とは別に、入学から卒業まで一貫して当該留学生の指導に当たる教員を配置することも検討に値する。

第二に、直接的な就職活動支援、キャリア支援についても、さらなる充実を図ることは必要である。早い段階から日本特有の就職活動についてのガイダンスを徹底すると同時に、例えば東京での就職を希望する場合、就職活動の経済的負担(交通費・宿泊費など)が非常に大きくなることなど、具体的に就職活動のプロセスをイメージできるような知識を身に付けさせることが求められる。他方、今回の調査では、日本で長期間働くことを希望する留学生が存外に多いことが明らかになったが、日本企業には、未だ留学生は直ぐに辞めてしまうという先入観が強いのではないだろうか。このような認識の違いを正すべく、企業側に働きかけることにも尽力すべきである。加えて、帰国予定の留学生も放置してはならない。卒業後、どのようなキャリアパスを描いているのかを把握

し、学んだことを活かしているかどうかの追跡調査やネットワーク作りを行うことが、教学を見直す上での貴重な資料となり、グローバルに活躍する卒業生一人一人が、大学の発展を支える財産そのものとなるからである。

第三に、院前期生が2年間で課程を修了し、就職を希望する場合、来日して概ね1年半、入学して半年で就職活動を始めなければならず、苦戦していることは先に繰り返し示した通りである。院前期生は学部時代に日本語専攻である場合が多く、専門性を深める機会は大学院の2年間のみである。したがって、就職への通過点として大学院を捉えるのではなく、やはり2年間は学業に専念することが望ましいだろう。しかし、学業に専念すれば、自ずと就職活動のために留年して大学院に3年間在籍するか、既卒者として大学院修了後に就職活動をすることになる。前者は経済的な負担が大きく、後者は新卒を重用する日本企業に就職するには圧倒的に不利な条件となる。不慣れな外国で何もかも日本人学生と同じペースで進めようとする、どこかに無理が生じるということ、留学生自身は言うまでもなく大学、企業も強く認識し、大学は既卒者に対しても継続的な就職活動支援を行うべきであり、企業も既卒者に対してさらに柔軟に配慮すべきであろう。

7. 付録：単純集計表および自由回答

問1 あなたの学生 ID を記入してください（省略）。

問2 あなたが日本で暮らしている期間は、合計して何年何か月ですか。

	度数	%		度数	%
2年未満	8	5.9	6年以上7年未満	11	8.1
2年以上3年未満	17	12.5	7年以上8年未満	7	5.1
3年以上4年未満	40	29.4	8年以上10年未満	5	3.6
4年以上5年未満	16	11.8	10年以上	5	3.6
5年以上6年未満	26	19.1	N.A	1	0.7
			Total	136	100.0

問3 あなたのお住まいは、次のどれにあてはまりますか。

	度数	%
アパート、マンションなどで一人暮らし	103	75.7
寮で暮らしている	9	6.6
家族または親戚の家で暮らしている	13	9.6
家族・親戚以外の知人と暮らしている	9	6.6
N.A	2	1.5
Total	136	100.0

問4 あなたの1ヶ月あたりの家賃はいくらですか。問3で「3または4」と答えた人は、あなた1人が払っている金額をお答えください。

	度数	%		度数	%
0円(払っていない)	5	3.7	60,000円～69,999円	6	4.4
1円～29,999円	14	10.3	70,000円以上	3	2.2
30,000円～39,999円	52	38.2	わからない	1	0.7
40,000円～49,999円	34	25.0	N.A	2	1.5
			Total	136	100.0

問5 あなたは、大学在学中にどのような活動に参加しましたか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

	あてはまる		あてはまらない	
	度数	%	度数	%
体育会・部活動	13	9.6	122	89.7
サークル・同好会の活動	35	25.7	100	73.5
地域やボランティアの活動	32	23.5	103	75.7
宗教関係の活動	9	6.6	126	92.6
インターンシップ	16	11.8	119	87.5
特になし	65	47.8	70	51.5

N.A. 1名(0.7%)

問6 あなたは、大学在学中にアルバイトをしましたか。

	度数	%		度数	%
はい	115	84.6	N.A	2	1.5
いいえ	19	14.0	Total	136	100.0

問7 問6で「1」と答えた人に、最も長く続けたアルバイトについてお聞きします。あなたは、どのくらいの期間、そのアルバイトをしましたか。

	度数	%		度数	%
3ヶ月未満	5	3.7	2年以上2年半未満	14	10.3
3ヶ月以上半年未満	7	5.1	2年半以上3年未満	15	11.0
半年以上1年未満	7	5.1	3年以上	28	20.6
1年以上1年半未満	19	14.0	非該当	19	14.0
1年半以上2年未満	20	14.7	N.A	2	1.5
			Total	136	100.0

問 8 あなたは、授業期間中に、平均して週に何時間くらい、そのアルバイトをしましたか。

	度数	%		度数	%
5 時間未満	17	12.5	20 時間以上 25 時間未満	12	8.8
5 時間以上 10 時間未満	18	13.2	25 時間以上	8	5.9
10 時間以上 15 時間未満	29	21.3	非該当	19	14.0
15 時間以上 20 時間未満	31	22.8	N.A.	2	1.5
			Total	136	100.0

問 9 普段の学生生活の中で、個人的な悩みを相談したり、困ったときに助けになってくれる人はいましたか。あてはまる人すべてに○をつけてください。

	あてはまる		あてはまらない	
	度数	%	度数	%
日本人学生	63	46.3	72	52.9
出身国の人（留学生含む）	95	69.9	40	29.4
それ以外の国の人（留学生含む）	24	17.6	111	81.6
家族・親戚	64	47.1	71	52.2
本学教員	56	41.2	79	58.1
本学職員	28	20.6	107	78.7
その他の日本人	47	34.6	88	64.7
その他*	2	1.5	133	97.8
特にいなかった	6	4.4	129	94.9

N.A. 1 名 (0.7%) / *家族の友人 (1 名), ボランティア仲間 (1 名)

問 10 あなたは就職活動をおこないましたか。

	度数	%		度数	%
はい	60	44.1	就活はしていないが就職先はある	5	3.7
いいえ	70	51.5	N.A.	1	0.7
			Total	136	100.0

問 11 問 10 で「1」と答えた人にお聞きします。あなたが、次のようなことをはじめておこなったのはいつでしたか。それぞれ何年の何月ごろかをお答えください。おこなわなかった場合は、「していない→9」に○をつけてください。

(a) 就職情報サイト（リクナビなど）に登録した

	度数	%		度数	%
2010 年 10 月	1	0.7	2012 年 1 月	7	5.1
2011 年 3 月	2	1.5	2012 年 2 月	2	1.5
2011 年 7 月	1	0.7	2012 年 3 月	3	2.2
2011 年 8 月	1	0.7	2012 年 4 月	2	1.5
2011 年 9 月	1	0.7	2012 年 6 月	1	0.7
2011 年 10 月	5	3.7	していない	1	0.7
2011 年 11 月	8	5.9	非該当	75	55.1
2011 年 12 月	22	16.2	N.A.	4	2.9
			Total	136	100.0

(b) 企業説明会に参加した

	度数	%		度数	%
2010年12月	1	0.7	2012年3月	3	2.2
2011年4月	1	0.7	2012年4月	3	2.2
2011年6月	1	0.7	2012年5月	1	0.7
2011年9月	1	0.7	2012年6月	2	1.5
2011年10月	2	1.5	2012年8月	2	1.5
2011年11月	3	2.2	していない	1	0.7
2011年12月	23	16.9	非該当	75	55.1
2012年1月	6	4.4	N.A.	6	4.4
2012年2月	5	3.7	Total	136	100.0

(c) エントリーシートを提出した

	度数	%		度数	%
2010年12月	1	0.7	2012年4月	2	1.5
2011年6月	1	0.7	2012年5月	3	2.2
2011年10月	2	1.5	2012年6月	2	1.5
2011年11月	1	0.7	2012年8月	1	0.7
2011年12月	7	5.1	2012年9月	1	0.7
2012年1月	16	11.8	していない	2	1.5
2012年2月	11	8.1	非該当	75	55.1
2012年3月	6	4.4	N.A.	5	3.7
			Total	136	100.0

(d) 企業の人事面接を受けた

	度数	%		度数	%
2010年12月	1	0.7	2012年6月	2	1.5
2011年9月	1	0.7	2012年7月	1	0.7
2011年11月	1	0.7	2012年10月	1	0.7
2012年1月	5	3.7	2012年11月	1	0.7
2012年2月	11	8.1	していない	6	4.4
2012年3月	15	11.0	非該当	75	55.1
2012年4月	8	5.9	N.A.	4	2.9
2012年5月	4	2.9	Total	136	100.0

問 12 就職活動の仕方（エントリーの仕方やエントリーシートの書き方，企業情報の収集，面接など）について，誰かに相談しましたか。あてはまる人すべてに○をつけてください。

	あてはまる		あてはまらない		非該当	
	度数	%	度数	%	度数	%
日本人学生	28	20.6	30	21.1	75	55.1
出身国の人（留学生含む）	28	20.6	30	21.1	75	55.1
それ以外の国の人（留学生含む）	9	6.6	49	36.0	75	55.1
家族・親戚	10	7.4	48	35.3	75	55.1
本学教員	18	13.2	40	29.4	75	55.1
本学職員	30	22.1	28	20.6	75	55.1
その他の日本人	20	14.7	38	27.9	75	55.1
その他*	3	2.2	55	40.4	75	55.1
特にいなかった	6	4.4	52	38.2	75	55.1

N.A. 3名（2.2%）／*他大学の先生（1名），社会人・OB・OG（1名），留学生支援団体（1名）

問 13 就職活動をはじめたころ，次のようなことをどのくらい重視していましたか。それぞれについてあてはまるものを1つ選び，○をつけてください。

	重視していた		少し重視していた		あまり重視していなかった		重視していなかった	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
正社員として働くこと	50	36.8	5	3.7	4	2.9	1	0.7
職種，仕事内容	49	36.0	9	6.6	0	0.0	1	0.7
給与	23	16.9	30	22.1	5	3.7	2	1.5
大企業であること	16	11.8	24	17.6	16	11.8	4	2.9
企業の知名度	14	10.3	29	21.3	13	9.6	3	2.2
長期雇用であること	26	19.1	20	14.7	7	5.1	7	5.1
語学力がいかせること	37	27.2	11	8.1	7	5.1	5	3.7
大学での専門分野との関連	11	8.1	17	12.5	19	14.0	13	9.6
自分の能力や適性と合っていること	37	27.2	18	13.2	2	1.5	1	0.7
将来役立つ技術，経営などを学べること	26	19.1	23	16.9	8	5.9	2	1.5
出身国と関連する仕事ができること	29	21.3	19	14.0	7	5.1	5	3.7

非該当は75名（55.1%）である。またN.A.は「職種，仕事内容」「企業の知名度」「将来役立つ技術，経営などを学べること」が2名（1.5%），「自分の能力や適性と合っていること」が3名（2.2%），それ以外は1名（0.7%）である。

問 14 就職活動中，キャリアセンターが提供するサービスを利用しましたか。

	度数	%		度数	%
利用した	53	30.9	非該当	75	55.1
利用しなかった	7	5.1	N.A	1	0.7
			Total	136	100.0

問15 問14で「1」と答えた人にお聞きします。キャリアセンターが提供するサービスのうち、何を利用しましたか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

	あてはまる		あてはまらない		非該当	
	度数	%	度数	%	度数	%
資料（本や雑誌、企業情報）	32	23.5	21	15.4	82	60.3
求人票	16	11.8	37	27.2	82	60.3
進路相談	17	12.5	36	26.5	82	60.3
履歴書、エントリーシート相談	29	21.3	24	17.6	82	60.3
面接相談	20	14.7	33	24.3	82	60.3
学内での企業説明会、セミナー、ガイダンス	46	33.8	7	5.1	82	60.3
インターンシップに関する相談	7	5.1	46	33.8	82	60.3
キャリアカウンセラーによる相談	18	13.2	35	25.7	82	60.3
e-career、キャリアセンターのHP	26	19.1	27	19.9	82	60.3
その他*	1	0.7	52	38.2	82	60.3

N.A. 1名 (0.7%) / *無記入 (1名)

問16 問14で「2」と答えた人にお聞きします。キャリアセンターが提供するサービスを利用しなかった理由は何ですか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

	あてはまる		あてはまらない		非該当	
	度数	%	度数	%	度数	%
存在を知らなかった	0	0.0	5	3.7	128	94.1
場所がわからなかった	1	0.7	4	2.9	128	94.1
扱っている情報量が少ない	0	0.0	5	3.7	128	94.1
サービスの利用の仕方がわからなかった	4	2.9	1	0.7	128	94.1
知りたいと思うことがなかった	3	2.2	2	1.5	128	94.1
その他	0	0.0	5	3.7	128	94.1

N.A. 3名 (2.2%)

問17 就職活動中、いくつの企業と次のようなことがありましたか。まったくなかった場合は0（ゼロ）と記入してください。

(a) OB・OG 訪問をした企業

	度数	%		度数	%		度数	%
0社	40	29.4	4社	1	0.7	35社	1	0.7
1社	4	2.9	5社	3	2.2	非該当	75	55.1
2社	7	5.1	10社	1	0.7	N.A.	4	2.9
						Total	136	100.0

(b) エントリーシートを送った企業

	度数	%		度数	%		度数	%
0社	4	2.9	8社	2	1.5	30社	5	3.7
1社	2	1.5	10社	9	6.6	34社	1	0.7
2社	3	2.2	12社	1	0.7	40社	1	0.7
3社	2	1.5	15社	7	5.1	50社	4	2.9
5社	2	1.5	20社	11	8.1	非該当	75	55.1
6社	1	0.7	23社	2	1.5	N.A.	1	0.7
7社	2	1.5	25社	1	0.7	Total	136	100.0

(c) 人事面接を受けた企業

	度数	%		度数	%		度数	%
0社	8	5.9	6社	5	3.7	15社	5	3.7
1社	5	3.7	7社	4	2.9	18社	3	2.2
2社	1	0.7	8社	5	3.7	20社	2	1.5
3社	6	4.4	10社	5	3.7	非該当	75	55.1
4社	1	0.7	11社	1	0.7	N.A.	2	1.5
5社	6	4.4	13社	2	1.5	Total	136	100.0

(d) 内定をもらった企業

	度数	%		度数	%		度数	%
0社	18	13.2	2社	10	7.4	非該当	75	55.1
1社	24	17.6	3社	5	3.7	N.A.	3	2.2
			4社	1	0.7	Total	136	100.0

問 18 はじめて内定をもらったのは、何年の何月ですか。内定をもらっていない場合は、「2. もらっていない」に○をつけてください。

	度数	%		度数	%
2012年3月	2	1.5	2012年11月	6	4.4
2012年4月	10	7.4	2012年12月	2	1.5
2012年5月	9	6.6	もらっていない	19	14.0
2012年6月	5	3.7	非該当	75	55.1
2012年7月	5	3.7	N.A.	2	1.5
2012年8月	1	0.7	Total	136	100.0

問 19 就職活動を終えたのは、何年の何月ですか。現在も就職活動を続けている場合は、「2. 継続中」に○をつけてください。

	度数	%		度数	%
2012年3月	2	1.5	2012年9月	3	2.2
2012年4月	11	8.1	2012年11月	4	2.9
2012年5月	8	5.9	2012年12月	2	1.5
2012年6月	6	4.4	継続中	16	11.8
2012年7月	4	2.9	非該当	75	55.1
2012年8月	3	2.2	N.A.	2	1.5
			Total	136	100.0

問 20 卒業後の進路について、現時点で確定しているもの1つに○をつけてください。

	度数	%		度数	%
正社員として就職	41	30.1	その他*	8	5.9
非正社員として就職	1	0.7	決まっていない	27	19.9
進学（受験予定も含む）	37	27.2	N.A.	1	0.7
就職活動の継続	21	15.4	Total	136	100.0

*帰国（1名）、中国企業の日本事務所（1名）、無記入（6名）

問 21 問 20 で「1 または 2」と答えた人にお聞きします。卒業後に就職する企業・団体名（以下、内定先とよびます）を下記の欄に記入してください。

	度数	%		度数	%
日系企業	36	26.5	非該当	93	68.4
外資系企業・その他	5	3.7	N.A.	2	1.5
			Total	136	100.0

問 22 内定先でのあなたの働き方は、次のどれにあてはまりますか。もっとも近いものを1つ選び、○をつけてください。

	度数	%		度数	%
総合職	29	21.3	わからない	0	0.0
一般職	2	1.5	非該当	93	68.4
技術職	6	4.4	N.A.	1	0.7
その他*	5	3.7	Total	136	100.0

*講師・teacher（3名）、editor（1名）、福祉会の支援員（1名）

問 23 内定先をはじめて知ったきっかけは、次のどれですか。もっとも近いものを1つ選び、○をつけてください。

	度数	%		度数	%
インターネット	4	2.9	企業説明会, セミナー, ジョブフェア	11	8.1
日本人の知り合いの紹介	4	2.9	新聞, 雑誌	1	0.7
出身国の知り合いの紹介	4	2.9	もともと知っていた	11	8.1
家族・親戚の紹介	2	1.5	その他	0	0.0
本学教員の紹介	3	2.2	非該当	93	68.4
本学職員の紹介	0	0.0	N.A.	2	1.5
求人票	1	0.7	Total	136	100.0

問 24 内定先に就職しようと思った決め手は何ですか。あてはまるもの3つに○をつけてください。

	あてはまる		あてはまらない		非該当	
	度数	%	度数	%	度数	%
正社員として働けること	11	8.1	31	22.8	93	68.4
職種, 仕事内容	21	15.4	21	15.4	93	68.4
給与	4	2.9	38	27.9	93	68.4
大企業であること	2	1.5	40	29.4	93	68.4
企業の知名度	5	3.7	37	27.2	93	68.4
長期雇用であること	4	2.9	38	27.9	93	68.4
企業や社員の雰囲気	19	14.0	23	16.9	93	68.4
語学力がいかせること	11	8.1	31	22.8	93	68.4
大学での専門分野との関連	10	7.4	32	23.5	93	68.4
自分の能力や適性と合っていること	20	14.7	22	16.2	93	68.4
将来役立つ技術, 経営などを学べること	12	8.8	30	22.1	93	68.4
出身国と関連する仕事ができること	11	8.1	31	22.8	93	68.4
家族・親戚にすすめられて	1	0.7	41	30.1	93	68.4
本学教員にすすめられて	0	0.0	42	30.9	93	68.4
家族・親戚, 教員以外の人にすすめられて	0	0.0	42	30.9	93	68.4
その他*	1	0.7	41	30.1	93	68.4
特になし	0	0.0	42	30.9	93	68.4

N.A. 1名 (0.7%) / *京都にある会社であるため (1名)

問 25 内定先において、最初に勤務（もしくは研修）することになっている場所（都道府県名）を記入してください。

場所：

	度数	%		度数	%
日本	22	16.2	非該当	93	68.4
日本以外	7	5.1	N.A.	1	0.7
まだ決まっていない	13	9.6	Total	136	100.0

都道府県：

	度数	%		度数	%
京都府	8	5.9	愛知県	1	0.7
大阪府	5	3.7	三重県	1	0.7
東京都	4	2.9	東海地区	1	0.7
神奈川県	1	0.7	兵庫県・京都府	1	0.7
新潟県	1	0.7	非該当	113	83.1
			Total	136	100.0

問 26 あなたは内定先から、今後、外国（日本・出身国以外）で働く予定があると言われてい
ますか。言われている場合は、国名も記入してください。

	度数	%		度数	%
言われている	4	2.9	非該当	93	68.4
言われていない	38	27.9	N.A.	1	0.7
			Total	136	100.0

国名：

	度数	%		度数	%
中国	4	2.9	インドネシア	1	0.7
韓国	1	0.7	全世界	1	0.7
中国・東南アジア	1	0.7	非該当	127	93.4
韓国・中国	1	0.7	Total	136	100.0

問 27 あなたは内定先において、どのくらいの期間働こうと考えていますか。

	度数	%		度数	%
3年未満	3	2.2	10年以上	17	12.5
3年以上5年未満	7	5.1	非該当	93	68.4
5年以上10年未満	13	9.6	N.A.	3	2.2
			Total	136	100.0

問 28 あなたは卒業後の進路に満足していますか。それとも不満ですか。

	度数	%		度数	%
満足	44	32.4	どちらかといえば不満	4	2.9
どちらかといえば満足	48	35.3	不満	2	1.5
どちらともいえない	33	24.3	N.A.	5	3.7
			Total	136	100.0

問 29 あなたは、最終的にどこで働きたいと考えていますか。

	度数	%		度数	%
日本で働きたい	45	33.1	まだ考えていない	30	22.1
出身国で働きたい	41	30.1	N.A.	1	0.7
日本・出身国以外の国で働きたい	19	14.0	Total	136	100.0

問 30 あなたの先々の具体的なキャリアビジョンを自由に記入してください。

地域：

	度数	%
(最終的に) 日本で働きたい	26	19.1
(最終的に) 出身国で働きたい	37	27.2
(最終的に) 日本か出身国のどちらかで働きたい・両国の懸け橋になりたい	10	7.4
(最終的に) 日本・出身国以外の国で働きたい	10	7.4
わからない・決まっていない	8	5.9
言及なし	21	15.4
N.A.	24	17.6
Total	136	100.0

仕事内容：

	度数	%		度数	%
起業	20	14.7	言及なし	59	43.4
教員・研究職	20	14.7	N.A.	24	17.6
その他の何らかの具体的な仕事	13	9.6	Total	136	100.0

問 31 学生生活を振り返ると、全般的に満足できるものでしたか。

	度数	%		度数	%
満足	46	33.8	どちらかといえば不満	3	2.2
どちらかといえば満足	61	44.9	不満	2	1.5
どちらともいえない	22	16.2	N.A.	2	1.5
			Total	136	100.0

問 32 あなたが日本で就職活動を行う上で、戸惑った点や困った点がありましたか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

	あてはまる		あてはまらない	
	度数	%	度数	%
就職活動を行う時期が早い	43	31.6	92	67.6
エントリーシートの書き方が難しい	44	32.4	91	66.9
SPI や筆記試験が難しい	39	28.7	96	70.6
面接で日本語がうまく伝わらなかった	20	14.7	115	84.6
面接で答えにくいことを聞かれた	11	8.1	124	91.2
たくさんのお金がかかる	45	33.1	90	66.2
留学生を採用する企業が少ない	27	19.9	108	79.4
一緒に就職活動を行える人が少ない	14	10.3	121	89.0
欲しい企業の情報が得られない	21	15.4	114	83.8
企業の情報が多すぎて選べない	20	14.7	115	84.6
本音と建て前などの文化の違いがある	32	23.5	103	75.7
その他*	4	2.9	131	96.3
特にない	18	13.2	117	86.0

N.A. 1名 (0.7%) / *社会福祉を専攻している者として、日本の福祉実践現場で働くことは難しく、社会福祉士という国家資格を取得しても就労ビザを持って働くことができない (1名)、中途採用が少ない (1名)、就業経験がある人は、就職活動をするにあたってかなり断られる (1名)、無記入 (1名)

問 33 学生生活や就職活動を振り返って、同志社大学が行っている生活・キャリア指導の良い点 (取り組み) や改善が必要と思われる点 (取り組み) がありましたら、自由に記入してください (以下、趣旨を損なわない程度に修正した主な意見を抜粋)。

【教職員に関する良い点】

- キャリアセンターはとても有効だと思う。ES の添削や面接のやり方など色々教えてもらった。キャリアセンターに、2人の留学生のためのアドバイザーがいるので、日本での就職を希望する学生は、まずキャリアセンターを利用するべきだと思う。
- 就活を始めた時、何もかもわからず、一杯不安を抱えていました。その時、キャリアセンターの方々も親切で、初歩中の初歩の段階から詳しく教えていただきました。
- キャリアセンターはいつも就活に関する情報をメールで知らせてくれます。そのため、会社説明会などの情報をミスせずに得ることができます。就活中、一人で悩むより相談に行けば、問題の対策を一緒に考えてくれます。
- キャリアセンターの職員の方々がとても優しく相談にのってください、就職活動をしていく中で、精神的に力になりました。
- 大学の職員たちはとても親切です。キャリアセンターにも色々な講座があり、勉強になりました。図書館が主催する講座は勉強にはとても良いです。論文の資料を探すときは助かりました。
- 企業を招いてセミナーを行っているのが良いです。留学生向けの情報が少ないです。
- キャリアセンターは余り役に立たないと思ったが、学内セミナーは非常に良かった。同志社大学出身のOB・OGが多く、人脈が広い点に感銘を受けた。
- 月に1度留学生課に行くのですが、職員の方々もいつも丁寧で親切だと思います。外国人留学生が聞き

取りやすくするためなのかわかりませんが、ゆっくりとやさしい敬語で話してくれます。

- 大学の環境もいいし、先生たちも親切だし、留学生への配慮も非常に行き届いているので感謝するばかりです。
- 大学の教員たちは、とても面倒見がよく、学習以外に生活の事も色々助けてくれた。

【制度・施設・環境に関する良い点】

- 今出川校地にはカウンセリングセンターが設けられ、学生の生活全般に関する相談ができると友達が教えてくれました。まだ利用するチャンスはないけれど、心温かく感じます。すごく安心して生活しています。
- 留学生なので、日本のことにあまり詳しくないので、同志社大学のチューター制度がすごく助けになりました。また、学費の延長、分納制度も役立ちました。
- 留学生向けの教職員の相談相手がいること。
- 新入生向けのぴあアシスタントと普段の学習・生活におけるアシスタント制度。
- 留学生として、色々な日本語課程、交流活動ができ、とても良いです。

【就職活動・キャリア指導に関する課題点】

- 留学生向けのガイダンスも早めに行ったら良いと思います。
- 就職活動についての提案ですが、留学生対象の就職指導が欲しいです。就職指導の教員や日本人学生を混ぜて、グループ型で勉強会や討論会などがあればと思います。
- 留学生専用の専門の担当者がいたら嬉しいと思う。日本語は上手に話せるかも知れないが、文章を書くのはまた違う。日本人から色々と添削してもらうことも、日本語を勉強する方法の1つなので、ちゃんとして欲しい（書き方も国によって違うし、表現もニュアンスも違うので）。日本の企業の種類について、知らないものが多い。
- 同志社大学の生活・キャリア指導はとても充実していると思います。いくつかの指導を受けながら、これといった改善点は見当たらなかったのですが、強いて言えば、留学生に特化した専門家（カウンセラーなど）がいなかったことです。（留学生用のカウンセラーはいるので、周知が不足していた）
- キャリアセンターには色々な就職情報があるが、留学生だけの就職情報は少ない気がする。
- 留学生向けの面接指導や、就活のことを聞かせていただける担当の方がいて欲しい。
- 留学生の皆さんが経験したことを聞きたいので、留学生活の経験がある、もしくは日本で就職活動経験がある外国人指導者が同志社大学にいて欲しいです。
- 「外国人が少ない」などの理由ではないかと思うが、説明会などは、全部寒梅館で行うことになっている。専攻によって、特に優先がある求人は、その専攻で行ったらどうでしょうか？例えば、福祉関係の説明会は新町キャンパスで、など。また、時々強制的に就職講座を聞かせるのは、学生、特に留学生を本気にさせやすいのではないかと思っている。また、外で先生や企業の人を誘って講座をしても良いと思う。
- 一般企業に限らずに、他の分野、例えば福祉関係の法人についての情報、特に外国人を採用する機関の情報を提供して欲しいです。
- 一般企業への就職だけでなく、社会福祉法人やNPO法人など公益法人で専門職として働くチャンスが増えたらと思う。大学レベルでできる限りの働きかけを望んでいる。
- キャリアセンターが提供するサービスをもっと利用しやすい環境にして欲しいです。

【キャンパスライフ、制度に関する課題点】

- 留学生が相談できる先生が少ない。
- 留学生が日本人学生と交流する機会を増やして欲しい。

- 各国の留学生会との交流が増えればいいと思います。例えば、留学生課と韓国人留学生会との交流など。
- 良い点は、学生のために解決しようとしている姿勢。改善点は、待つ時間が長い。
- 留学生課と各学部事務室とが上手くコミュニケーションをとるともっと良くなるのではないかと思います。
- 奨学金に関して、制度がよくわからなかったのですが、もっと平等に、本当に成績が優秀である学生、経済的に必要な学生に支給して欲しいです。本学の留学生たちが、生活上の情報などを手に入れやすいように。
- 改善点は、奨学金が少ないこと。奨学金の取得が成績に直接に連動しないことが、学習意欲のある学生にとっては良くないと思います。
- 学費減免のランクや奨学金の範囲をもっと拡大して欲しいです。
- 食堂を含め、気軽に座って休める所が少ないです。今回の工事で良心館の大きな食堂ができたのは良いのですが、未だに昼休みには席が足りないです。明德館の地下がラウンジになればありがたいのですが、一般的にそういう所が増えて欲しいです。
- 良い点は、別科の先生の進学についての指導。親切で熱心な先生が多いです。チューター制度があって良かったと思います。私費留学生の学生寮が遠いです。家賃も安くないです。学生寮は、留学生と日本人学生と一緒に住むべきだと思います。お互いの理解と交流を深めることができます。留学生と日本人学生の交流機会が少ないと思います。保証人（部屋を借りる時と入学する時）については困ると思います。
- 留学生が使用できる寮が少し遠いです。来日したばかりの時、部屋探しに相当苦労しました。大学の教授と職員の方々はとても親切です。様々な相談にのってくださって助かりました。
- 2011年に入学した時、ちょうど保証人制度が変更になりました。同志社大学は、そのことに対するプランなどの対応が異常に遅かった。
- 留学生別、出身国の留学生会があるにもかかわらず、その活用がうまくいっていない気がします。少なくとも、大学側から留学生会が使える事務所を提供し、留学生の苦勞に留学生会が対応できるように配慮する必要があると思います。
- ルールというものの概念が強すぎます。留学生生活への関心、サービスが少ないです。事情を聴かずに、全てルールに従うところが嫌です。
- 留学生向けのインターンシップが少ない。図書館の利用時間が短い（京田辺キャンパスは21:00に閉館なので、試験期間中ももっと延びて欲しい）。学部間交流を増やして欲しい。日本人との交流（文化や習慣だけでなく、学問や専門的なディスカッションも行ってみたい）。学生生活面のケアが足りないと思う。英語の授業における成績評価では、Nativeのほうが高いが、日本人の先生は和訳に力を入れ過ぎていると感じた。留学生向けの就職指導は積極的に取り組んでいると思った。

【その他】

- 1年次の必須科目は頑張ってとっておくべきだったと今は思います。年が経つごとに1年次で落とした科目が大変になってきたので。
- M3になると学校から何の支援もないのが辛い。
- キリスト教の学校なのに handbook が日曜日から始まるとか、クリスマスイブでも授業があることに対し、違和感を覚えます。日本の文部科学省にそこまで従わなくてもと思ったこともあります。これからはもっとキリスト教的なアピールを期待しています。

注

- (1) 以下、これを「院前期」と称する。
- (2) 以下、これを「院後期」と称する。
- (3) 同志社大学基礎データ集 (http://www.doshisha.ac.jp/information/overview/basic_data/new.html) より。
- (4) 詳細は、藤本昌代・浦坂純子・森山智彦・ハッカライネン・ニーナ [2012] 「留学生の就職活動におけるソーシャル・サポートと自律性」『評論・社会科学』（同志社大学社会学会）102号，pp.38-65を参照のこと。
- (5) 有効回答者136名のうち、就職活動を行なったか否かが不明な1名を除いた135名を分析対象とする。
- (6) 全て文系の学生である。
- (7) これらは対人であるが、個別に話をしなくても情報を取得することができ、必ずしも対人コミュニケーションを必要としないので、ここでは対物に含めている。
- (8) ただし、院前期生は取得単位数が少ないため差が見られない。

Successive Report, Social Support and Autonomous Action on the Job Hunting of International Students

Masayo Fujimoto, Junko Urasaka and Tomohiko Moriyama

In this report, we analyzed the recent “Doshisha Univ.international students questionnaire survey : Dec.2012”, which was carried out based on the analysis of previous survey in March 2012. This survey targeted to the students who would finish their courses in bachelors and masters. We focused the analysis that there are similar results with previous survey with newly adding the students in science and engineering faculties.

Similar to the previous survey, we analyzed new result from three view points, which are the social support, various activity experiences and the detail of their job hunting, after divided into three groups regarding to their job hunting experiences and those results. It was confirmed again that the group with successful job hunting had won the social support by their own active manor, and executed their job hunting similarly as Japanese students.

Key words : International student, Job hunting, Social support, Autonomous action